

武者小路實篤選集

第二卷

武者小路実篤選集 第二卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 2 卷

昭和39年11月25日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者小路実篤

発行者 真鍋謙二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 河上製本工場

東京都新宿区納戸町五番地
発行所 図書出版株式会社 青銅社

電話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

序

「ある男」は勿論僕である。僕も一人の男である。僕の最もよく知っている、はなれることの出来ない一人の男である。僕はこれをかいたのは、改造の山本実彦にたのまれたからではあるが、たのまれなければ勿論かなかった。少なくともこんなに長くは書かなかったろう。勿論僕は自分のことを語ることは嫌いではないし、文筆の仕事をしている以上、自分が知っている唯一の人間について出来るだけ人生を研究するのは当然なことだから、断片的にはかいたろうが、この作品は生まれなかったろう。僕は告白するためにこの小説をかいたのではない。もっと気楽に、自分が一番饒舌りたい一個の人間のことをしゃべったのだ。僕は他人に迷惑をなるべく与えないように饒舌ったと思うが、他人に迷惑を与えたなら、その点はあやまりたい。自分のことを語る御相伴に自分のことを語りたくない他人のことを語るのは僕の神経が許さない。僕自身についてもしゃべりたくないことが、皆無ではない。自分はなんでもしゃべる男で

後

はない。しかし饒舌ったことにはなるべく嘘は入れないように心がけたが、しかし忘れたことも多く、記憶ちがいもないとは言えない。

ここに書かれたのは僕の前半生で、後半生は僕はかくとは思わないが、これを書いたあとで、僕はここで出てくる妻と別れて、今の妻と結婚し、三人の娘をもち、今七人の孫を持っていることを書き、ここにかいてあると思う養女の喜久子は他にかたづいて今は亡き人になっていることをつけ加える。お貞さんは相当以前になくなり、僕が知ったのは数年後であった。

僕は今、昔風に言って古稀でまだ元気にしている。新しき村の仕事は、今日まで一日も休まずにつづけて来ているが、始め思ったほど、早くものにはならなかったが、やっと基礎が出来たのは事実だ。(昭和三十九年七月六日)

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第二卷

目次

或る男

7

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

或る男

彼のことを一番よく知っているのは恐らく自分であろう。自分は彼のことは残らず知っているはずだ。自分は彼自身だからである。しかし自分は記憶のいい方ではない、また正直に何もかもかくことの出来るほどの人間でもない。また自分の筆は何でも表現が出来るというわけにはゆかない。また彼は一個の人間であって見れば、彼のことをのこらず自分が知るわけにはゆかない。しかしともかくかいて見よう。

「彼のことをかくのはいいが、御自慢だけはよしてもらいたい」

自慢出来ることがあれば自慢したいが、しかし彼の今まで来た生活は至極無難で、色彩が乏しい。自分のことを今かく気はあまりないのだ。

「それなら書かなければいいじゃないか」

書かないつもりでいた。始めたのまれた時、自分はすぐ断わった。ところが自分は今一つ他に仕事をしているので、自分はその方に自分の想像力を全部つかおうと思っっている、彼のこと以外に別に面白いものをかくわけにはゆかないのだ。無理してまで書く必要はないかも知れないが、しかし書く約束をした以上はそれを果たさないのは気になる。たのまれるとつい承知がしたくなる。それに金というもののあるに越したことはない今の身分では、つい何かかく気になる。実際、たのまれてかくということがなかったら、そして締め切りというものがな

かったら、自分は未熟品や速成品をつくらずにすむであろう。そして純粋な作品だけをかいてゆくわけにゆくだろう。しかし自分はたのまれてかいたもの、金のためにかいたもの、雑誌のためにかいたものが全部だめなものとは思っていない。そしてたのまれなければ書けなかった作品が、かけたことを喜んだこともある。しかし恥ずかしい作品を時々発表することがある。今後はそういうことはくり返したくないと思っている。そのくせ今後無理をしそうだ。自分は雑誌とか、金とか、批評家とかのいないところでのんびり、静かに仕事をしたいと思うことがある。そうすれば、完成品だけを発表出来ると思う。自分のかきたいものだけをかくことが出来ると思う。そして濫作しないですむと思う。しかし自分は、今のままつづけてゆくのもわるいとはかりは思わない。そして今度、彼のことをかくことにしたら、それも悪くないと思った。ただ、まだ彼のことをかくにしては彼は未成年な男であり、彼の半生は変化のない、ごく単調に、生長したにすぎない。だから、読む人を気の毒に思う。同時に雑誌にも彼にも気の毒に思う。しかしともかくことにする。今までの自分のかいたものと重複するところも多いと思うが、それもそのところに達した時の気持ちで重複を恐れずにかく時もあろう。またはいふ、時もある。第一自分はどこまで書く気になれるか、それもわからない。自分が一番先にあきることを恐れる。しかし自分のことを饒舌することは誰も余りあきないのかも知れない。殊に自分は嫌いではないようだ。しかし自分はここで告白をしようとは思わない。また事実になりきろうとも思わない。自由にかきいように、ここに一人の人間を生かしてお目にかけられれば、それで自分は満足する。言い訳はこのぐらいにしておく、きりがないから。あとは実態で見てもらうより仕方がない、少し恐ろしい気もするが、大胆でない人間でもなさそうだ。

彼は一八八五年五月十二日に東京の麴町元園町で生まれた。彼は自分の生まれた月日が、自分の好きな八、五、十二、という数からなりたち、そして八と五が重なっていることにある不明な喜びを感じている。

何時ごろに生まれたかは、彼の母はまだ生きているが、彼は聞いたことはない。（その後聞いたところだと午後二時ごろだったそうだ。）

ただ彼の耳にはさんだところによると、彼の父方の叔母（あとで話すが、父の叔父の子である）が不義したといつてその夫にどなり込まれたので、その母にあたる祖母が氣絶した。それで母も心配して彼が生まれたのは少し早すぎた。顔は紫色だった、母の実母達は心配して、かにばを顔にぬったところへ医者に来て、困ったそう

だ。

彼の両親は公卿であつた。しかし二人とも妾腹であつた。父の実母は彼の二十二三までは生きていた。彼等はそれを身体が大きいので、大き祖母さんとよんでいた。前にかいた祖母というのは、父の父の弟の本妻で、その祖母には女の子きりないので父があとをついだ。この祖母の方を身体が小さいので、彼等は小さ祖母さんとよんでいた。小さ祖母さんは公卿出であつた。大き祖母さんより一つ齡上だったが、大き祖母さんの世話で、彼の家にかたづいて来たそうで、正式な時は小さ祖母さんが上座に坐っていたが、普段は大き祖母さんの方が威張っていた。話がとぶが、叔母というのは、この小さ祖母さんが往来を歩いていて、ある簾屋の前を通つたらその時死んだ簾屋の娘の人玉が小さ祖母さんの袂とか懷中とかに入つて出来たので、簾屋の娘の生まれ代わりだと彼達は話されていた。ともかく二三度離縁になつて、最後にはある小さい漢方医の細君になつた。彼の伝記にはあまり出て来ないからついでにかくが、彼はこの叔母を子供心に軽蔑はしていたかも知れないが厚意はもっていた。その医者は新宿の遊廓のすぐそばに住んでいて、子供の時そこに遊びに行つて物見台にのぼると、遊廓の蒲団がならべ

てはしてあるのを今でもぼんやり彼は思い出すことが出来る。

彼の母方の祖父は非常な厳格な人間で、学者肌で、公卿華族のうちで最も漢学にくわしく、本をよむことが何より好きで、書斎には一切人を入れないので、塵がたまつて、下駄はいて出入りしていたと彼は聞いている。この祖父がなぜ妾をおいていたかという、それはその祖父と結婚するはずの女の人が白痴にちかいので、その実家、同じく公卿であつたその家から、妾をつけてよこしたのだそうで、その女なら自分の娘を大事にしてくれるという信用をしてよこされたので、非常に快活な、忠実な働くことの好きな人であつた。藤島さんとか、ふうさんとか皆によばれていた。

大き祖母さんの名は玉浦と言つた。藤島も玉浦も農家の出である。だから彼の血には両方の祖母を通して百姓の血がかよつていと言へる。

彼の母は八人の子を生んで、彼はその末っ児である。始めの五人は育たなかつた。小さ祖母さんや、大き祖母さんはこれを母のせいにしていた。しかしそれは父の道楽が原因の病氣から来ているらしく、父がその病氣をなおしてから、あと三人子供が育つた。

そのかわり彼の父は彼の生まれる時には、もう死病にとつつかれていた。

三人のうち一番上は女の子で伊嘉子と言つた。次ぎは男で公共と言つた。彼の生まれた時二人は叔父の所に邪魔になるのでやられていた。その時姉は六つで、兄は三つだつた。二人が家に帰つて来た時には彼はもう母のわきにねていたので、二人は大よろこびだつたそう。

姉の伊嘉子という名は母が姉をうむ時、藤島と一緒に伊香保に行った。そしてそのために姉がともかく育つたというので伊嘉子と名づけた。当時汽車のない時分に伊香保に行つて、それから子供が育つようになったという

ことは、伊香保ゆきの主張者だった藤島の祖母さん（彼等は初め、この人を神田のお祖母さんと言い、あとでは三浦のお祖母さんとよんでいたが）の一生一代の自慢で彼等は何度その祖母から伊香保ゆきの話をきかされたか知れなかった。「また始まった」と皆笑った。

大久保彦左衛門の「鳶の巢山」？ のようなものである。この時母の妹も出かけてそれから子供が出来るようになったのだそうだから、祖母の自慢するのも無理はなかった。

殊に彼の家では五人つづけて死んだ。小さく祖母さんや大き祖母さんはその度にがっかりすると同時に腹をたてた。そして母を逐い出して丈夫な子供の出来る妻を迎えたがった。そして子供が出来たらしいという、また石塔が一つふえるのかと露骨に言った。だから母や藤島にとっては今度また子供が死んだら自分達も死ぬぐらいの決心をしていた。そしてその決心の甲斐があったのだ。藤島の自慢はそこから来ている。

実際彼の母は、何度も死ぬ覚悟をしたらしい。そして実家へ逃げ帰ろうと思ったことも一度や二度、十度や二十度ではなかったであろう。

しかしついに辛抱した。そして彼の同胞三人が生まれた。

三

彼の父は病的の疳癪持ちだったそうだ。頭は公卿のうちで一二を争い、公卿で最初に演説したのは彼の父である。母に言っていた。そして岩倉さんと一緒に西洋へ行きドイツに七年間ほど留學して居たので、いろいろ未来のことについても考えていた。そして父の言うことはみんなあたっていると母は言っている。今に女中などはつかえない時がくると父が言っていたが、本当にそうだと母はいつか言っていた。父の友は大概大臣になっていた。

る、父がいれば大臣になっているだろうと母は言っている。

實際彼の父はいろいろのことをくわだてた。東北への鉄道をつくる發起人にもなり、華族会館をつくつたのも彼の父の主張だったと彼は母からきかされている。しかし仕事が出来上がると何か不快なことが目につくので喧嘩してはやめてしまふのが癖らしかった。彼も大きくなって或る日、古い反古のうちから父が「それ哲人は何かを恥じる」とかいふ文句で、何か辞職した時の草稿を見たことがある。

しかし彼は父のことをあまりくわしくは知らない。父が死んだ時、彼は三つだったから、何も父については覚えていない。兄が少し覚えているのが彼には羨ましかった。彼は人間には両親のあるものだといふことは、ずつとあとで知った。学校へ入ったころには、親は一人のもので、母だけのものと思っていた。父というものの味は彼は知らない。彼はよく父の位牌の前に坐らせられた。毎朝父の位牌の前に丁寧に坐ってお辞儀をするのが仕事であったが、父というものは本当の意味ではわからなかった。

よく母から「お父さんは今に青いお馬をもつて帰っていらっしゃる」と言われたことを覚えているが、お父さんがなんだか自分にはわからなかった。ただ何となくなつかしいもので、その上、馬がほしいので、よく母に、「いつお馬もつて帰っていらっしゃるの」と聞いたことを今でも彼は思い出す。

しかし彼はそれを信じることが出来なかった。母や姉や兄を嘘つきとは思わなかったが、何だか信じられない夢の話のように思っていた。

四

父は子供を非常に愛した。死ぬ時でも、子供がさわいでいるのを聞くのは父の一番のよろこびだった。あまり